

今年度、最終号となりました。1年間本当にありがとうございました。
今後も研究内容を中心に、様々なことを発信していきたいと思いを。
また、来年度のNEWSLETTERも、ぜひご覧ください



第23回 教育研究発表会

令和4年2月18日(金)第23回教育研究発表会を開催しました。本年度もオンラインでの開催となりましたが、京都市立学校・園をはじめ、全国からも多くの方にご参加いただきました。これまで研究にご協力いただいた研究協力校の校長先生をはじめ、教職員の皆様にはこの場を借りて心より感謝申し上げます。

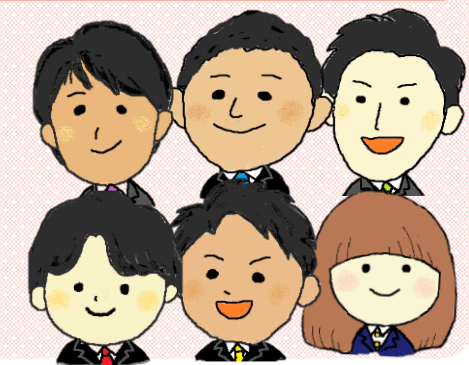


研究発表動画・研究論文・成果物・京都発については、3月下旬に研究課 Web サイトに掲載します。
ぜひご覧いただき、各校での実践にご活用ください。

京都市総合教育センター研究課



こちらからも
アクセスできます。



〈小学校 情報教育〉

ICT を文房具にする取組
～日常的な活用と校内組織づくりに注目して～

研究員:木村 祐太

日常的に活用→慣れる→こんな風に使えるかも！

ICTを使った授業をしなくては！ とは言え、複雑な使い方をするのは難しいですね。そこでSTEP1、先生が授業の1場面、例えば児童のノートを共有して比較することから始めてみてください。次はSTEP2です。1時間の授業の終わりに学んだことを生かして問題作りをする、先生が共有したモデルを必要な時に見る、自分の技の様子を撮影して分析するなど簡単な使い方で大丈夫です。授業時間外も帯時間のタイピング練習やゲームを通したスキルアップ、毎日の振り返りなど活用のチャンスはたくさんあります。大切なことは、**日常的に使うことと児童が必要だと感じたときに使えるようにしておくこと**。児童が「～に使いたい」と言い出したらチャンスです。少しずつ児童の裁量を増やしてSTEP3に向かいたいですね。

また校内では情報共有が欠かせません。情報共有の目的は、教科のねらいの達成に迫る上でのICTを使うことの「価値と課題の共有」です。シートに事例を記入し、それを分析、学年ごとに蓄積しておくことで翌年以降の参考にしやすくなります。その手間が難しいのであれば、校内研究の分析の視点の一つに取り入れる、授業の動画を共有して分析する等、工夫して情報共有してみてください。



〈小学校 外国語教育〉

学びに向かう力の育成を目指した外国語教育の一方策
～外国語を用いて伝え合う楽しさを実感させながら～

研究員:丹後 由香

豊かな学習環境が「学びに向かう力」を発揮させる

「子どもたちの限界をこちらで決めてはいけない」これは、今回、研究協力いただいたある先生の感想でした。この2年間の研究を通して、低学年における外国語教育の意義やその有用性について検証してきました。初めて外国語に触れる段階であるがゆえに、児童は指導者が導く手厚い指導を求めているのでしょうか。いいえ、それ以上に児童は、自分たちで考えて取り組むことのできる学習環境を求めているのです。

本研究では、指導者による深い児童理解のもと、児童にとって単元との出会いが自分事となるように課題設定を工夫することによって、**児童自身が単元のためや活動の見通しについて考えることを大切にしました**。そして、その達成に向けた学習活動では、指導者主導によるものだけでなく、児童が学習方法について考え取り組める時間を設定し、その際に活用できる様々な教材・教具を提供するなど、**学習活動を児童に委ねる**ようにしました。すると児童は、友だちと協力したり、自分でじっくり考え取り組んだりする中で、相手によりわかりやすく伝えようとジェスチャーを取り入れる子、進んで英語表現を言おうとする子、相手の伝えようとしていることを確かめながら理解しようとする子、わからない英語表現があった時にはGIGA端末に用意された音声カードを使って聞いて確かめようとする子がいるなど、**学びに向かう力を無意識に発揮**していくことがわかりました。子どもの持ち前の主体性を、**指導者が丁寧に見取って価値付けていく**ことで、中学年以降の外国語教育における主体的な姿もまた変わってくるのではないかと考えます。

こういった指導観を大切に、児童の「学びに向かう力」の育成を目指していきましょう。



裏にもあります！！

〈小・中学校 教科指導/社会科〉

学ぶ意味を実感できる社会科を目指して
～小中で多面的・多角的に事象を捉える力の育成を通して～

研究員:藤本 裕之

教科指導で小中をつないでみませんか？

汎用性の高い「多面的・多角的に事象を捉える力」を小中が連携しながら高めることで「授業で学習していることは将来にわたって役に立つんだ」と児童生徒が実感できるのではないかと考え研究を進めました。

校種や教科領域を問わず日常的に行われてきた学習活動の中から4つを、「**視点が表出されやすい学習活動**」として捉えなおし、それらの活動で児童生徒たちが半ば**無自覚に発揮している視点**を、見える一ペという道具を用いて**可視化して価値付ける**ことを大切にしました。そうすることで**視点の自覚化**を促し、多面的・多角的に事象を捉える力を鍛えていきました。

実践後、「授業で学習していることは将来にわたって役に立つ」と回答した中学3年生は、その理由を右のように表現しました。過去の歴史的事象を一例に、未知の状況において多面的・多角的に事象を捉えることの必要性を説明しています。

昔、産業革命が起こったとき、環境や人権という視点が足りなかったように、何かを作り出すときには、その先のことをいろんな視点から予想しなければならないから

小学校高学年の実践では、「役に立つという実感の高まり」というところまで示すことはできませんでした。しかし、いろいろな視点を働かせて課題解決の**見通しを立てる姿が他教科でも見られたり**、「立場やお金という視点は自分の考えになかったので、なるほどと思った」といった、**思考過程で発揮している視点に着目した記述**なども見られたりするようになってきました。授業を通して、多面的・多角的に事象を捉える大切さに気づき始めている様子が小学生でもうかがえたのです。こうした**児童たちが引き続き、進学する中学校での学びを通して**、学ぶ意味を将来にわたる有用性にも見いだしてくれると思っています。



具体的な手立てや実践については、研究課 HP に掲載される論文や成果物をぜひ参考にしてください！

〈中学校 教科指導/数学科〉

数学科における「個別最適な学び」と「協働的な学び」の授業の在り方を求めて
～GIGA 端末を活用した思考過程の見える化を通して～

研究員:寺井 淳

思考の過程に着目して考えたことを表現する

全ての生徒が問題解決に向かえるようにしたい。しかし、日々の授業で頑張って考えようとしているのに、問題解決が進まない生徒がいるのではないのでしょうか。本研究では、答えにたどり着くまでの**思考の過程**を**見える化**することによって、子どもたちの**考える力や表現する力**を高めることができるのではないかと考えました。

「①思考の過程に着目する②学びを生かす③数学的な表現を関連付ける④考え方を共有する」この四つの手立てを講じることで、問題の解決に向けて自分がどのように考えたのかをわかりやすく表現する「**思考過程の見える化**」を取り入れた授業の追究を研究活動の中心に据えて実践を進めました。

実践では、問いを工夫することで生徒が思考の過程に着目することができるようにしました。GIGA 端末を活用して過去の学びを生かしたり、式、図、表、グラフなど数学的な表現を関連付けたりすることで**試行錯誤して考える姿**が見られました。考え方を共有する場面では**自分の考え方と他者の考え方を比較し、分類・整理**するなど**多様な視点で考える**ことにもつながりました。実践後には授業を振り返って「計算するとき図も活用しつつ計算してできた」といった図と式を関連付けて考えることができた生徒や、「自分の考えを整理し、わかりやすく他の人に伝えられるようにしたい」といった自分の考えを数学的に表現し、他者に伝える姿勢がもてるようになった生徒もいました。**自分自身の考えを深く理解し、根拠をもとに他者へ説明することへとつながったのではないかと考えています。思考の過程に着目し、数学的な思考力や表現力の育成を図る実践**をこれからも積み重ねていきたいと思っています。



〈中学校 情報教育〉

情報活用能力を基盤とした学習を自己調整する力の育成
～GIGA 端末を活用した学習方略の共有と学習情報の管理を通して～

研究員:久保田 守

より主体的に学習に向かうために！

「上手な勉強のやり方が分からない」や「勉強が計画どおりに進まない」といった学習上の悩みを抱えたままでは生徒が主体的に学習に取り組んでいくことは難しいでしょう。本研究では、生徒が自らの学習過程を客観的に捉え、学習を改善するための振り返りを行いながら学習を自己調整していくことを目指しました。

そのためには学習に向かっていくための**動機づけ**や学習の進み具合に応じて選択できる多様な**学習方略**、自らの学習過程を客観的に捉えるための**メタ認知**といった三つの要素を生徒は備える必要があります。

実践では、この点を支援するためにGIGA 端末を活用し、生徒が指導者やクラスメイトと学習方略を共有すること、表計算ソフトを用いて自身の学習情報（学習した順序や時間、内容や方法、テストの結果など）を管理し分析することに取り組みました。また、学習方略を獲得することやメタ認知を働かせることにより、生徒が学習の成果を実感し、動機づけを更に高めていくことができるように進めていきました。

実践後には、「自分の勉強の偏りとかが分かり、**バランスよく勉強することができるようになった**」や「テスト前でも今回は**慌てることなく勉強できた**」といった、これまでに学習した記録や学習方略を活用して、学習の自己調整ができたことを表す生徒からの声が挙がってきました。そして、自身の学習をモニタリングしながら、学習する順序や時間、内容や方略、学習へのモチベーションを適切にコントロールできる生徒が増えてきました。詳しくは研究課 HP に掲載している論文をご覧ください。



〈小学校 教科指導/算数科〉

算数科における「個別最適な学び」と「協働的な学び」の授業の在り方を求めて
～子どもが思考し判断し表現し続ける授業デザインの提案～

研究員:梶村 契

子どもたちに学習活動を委ねると意欲的に考える

「友だちと話し合いながら、ここはあぁじゃないかとか、『これはこうだ』と決めつけられずに自分たちで考えてできるのがよかった」これは研究実践後の子どもから聞き取った言葉です。大人と比べて子どもは様々な点で未熟です。そのため、子どもたちに考える場を与えながらも、「この流れで学習を進めます」「この方法ですといいよね」というように、教えてあげようとするのが少なからずあったのではないのでしょうか。本研究では、算数科の**自力解決と集団解決の境目を無くす**ことによって、一人でじっくり考えたり、友だちと話し合ったり、わからなければGIGA 端末から過去の学習を振り返って考えてみたりするなど、**子どもたちだけで何とか問題を解こうと一生懸命考える姿**が見られるようになりました。もちろん、一人では考えられない子どものために、ヒントカードを準備したり、個別支援をしたりするなど、**個に応じた指導は必要**です。実践後のアンケートや聞き取りから、「絵や図を使って考えることができた」「友だちに自分の考えをどうすれば伝わるのかを考えることができた」「わからないことがあればすぐに友だちに聞いて理解することができた」という意見を聞くことができました。子どもが**自分に合う学習活動や学習方法を選択できる「個別最適な学び」となる授業が**、子どもたちの**思考をより働かせる**ことになりました。また、友だちと一緒に考える「**協働的な学び**」によって、子どもたちだけでも**理解を深める**ことができたり、**相手に伝える表現力の高まり**につながったりしました。子どもの力をより伸ばしていくためにも、子どもを信じ、学習活動を子どもたちに委ねる授業を、これからも考えていきたいと思っています。

